

国勢調査における外国人人口の過少計上に関する

地域差とその経年変化

Regional Differences and their trends in the Undercount of the Number of Foreign Residents of the Population Census in Japan

野村侑平（早稲田大学・院）

NOMURA Yuhei (Graduate School, Waseda University)

35-twukks@akane.waseda.jp

国勢調査における外国人人口は、回答への非協力的な態度などを要因として、在留外国人統計のそれと比較すると過少計上される傾向にあることが知られている（石川 2005, 2019）。また、その傾向は、性別や国籍等の各指標との関連が不明瞭であるほか、都市化度とゆるやかに関連していることが明らかされている（山本ら 2022）。ただし、国勢調査の外国人人口の過少計上に関する空間分布とその時系列変化の特徴については、都道府県単位に限らず市区町村単位でも検討する余地がある。

そこで、本報告では、国勢調査と同年 12 月末の在留外国人統計における外国人人口の比率を「捕捉率」として、①時系列的自己相関、②空間的自己相関に関する特徴について検討する。分析手法は、二統計の比較が可能である 1990 年から 2020 年までの計 7 か年分の都道府県別捕捉率、2015 年・2020 年の計 2 か年分の全国市区町村別捕捉率を算出する。次に、①は各年間の相関行列を作成し、②は空間的自己相関の指標である Moran's I 統計量とローカルモラン統計量を用いて検討する。

分析の結果、①は、1995 年-2005 年、2010 年-2020 年の各 3 か年の都道府県別捕捉率に正の相関がみられたものの、1990 年から 2020 年にかけての時系列的な一貫性は示されなかった。②は、Moran's I 統計量を算出したところ、1995 年 ($I=0.44$)、2000 年 ($I=0.37$) は弱い正の空間相関が検出されたが、1990 年 ($I=0.08$)、2015 年 ($I=0.02$) はランダムな空間分布に近いことが示された。加えて、2015 年と 2020 年における市区町村別捕捉率の分布傾向をローカルモラン統計量により測定したところ、季節労働者を多く受け入れる北海道や長野県などの一部の自治体を除くと、「ホットスポット」、「クールスポット」が継続的に出現するケースはみられなかった。

以上より、国勢調査における外国人人口の過少推計について、時系列的な一貫性を有さず、経年的に作用する空間的な規定要因もランダムであることが窺える。このことから、過少推計により疑似的な地域差が生じる可能性が高く、その対応に留意する必要性が示唆された。

参考文献

石川義孝 2005. 外国人関係の 2 統計の比較. 人口学研究 37: 83-94.

石川義孝編 2019. 『地図でみる日本の外国人 改訂版』ナカニシヤ出版.

山本涼子・埴淵知哉・山内昌和 2022. 国勢調査の回答状況における地域差とその推移—聞き取り率・コロナ禍・外国人に注目して—. E-journal GEO 17-2: 197-209.